

ご挨拶



天理教民生児童委員連盟委員長

山田 常則

令和の時代を迎え、「ラグビーワールドカップ」、来年に迎える「東京オリンピック」と言った心躍る行事がある一方で、昨年の台風豪雨災害に続き本年もまた超大型台風による被害が広い範囲で続出しています。「未曾有、想定外、記録的な大雨、経験した事のない大雨、一か月分の雨が半日で」などの言葉が見受けられます。今年の豪雨は何度も来襲し、被害を受けたその上にまた大雨を降らし、復興のきつかけが掴めないのでは無いのでしょうか。被害を受けられた方々には心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

近年、民生児童委員には「災害時避難行動要支援者名簿」が周知され、地域において非常時の活動が期待されています。全国の民生児童委員の方々、特に被災地の委員の方々は色々な場面で地域の方々のためにご活動の事と想像いたします。

天理教民生児童委員連盟では「時代の流れとともに、変容・多様化する生活環境や社会状況を十分に理解して、現代社会で難儀する人におたすけを実践していかなければならない」との表統領の方針のもと「おやさ」と研修会「地域のおたすけ研修会」などを開催し、ようぼく民生児童委員としての資質向上のために努力しています。又本年は「天理教こども食堂ネットワーク」の立ち上げにも協力し「地域の交流拠点」「子供の貧困対策」の二つの役割を推進しています。

本年は3年に一度の委員改選の時を迎えます。長年お勤めいただいた方、これからお勤めになる方などもおられます。少子高齢化の影響を受けて、前回改選時に担当者不在の地域が見受けられました。ぜひ多くのようぼくが助け合いの精神を発揮して、民生児童委員として地域社会のために、地域のおたすけのために立ち上がっていただきたいと願います。

変わりゆく社会環境の中で、難渋している人たちが大勢います。その方々に手を差し伸べるきつかけとなる社会活動の一端を担い、積極的に歩みを進めていきたいと考えています。道の民生児童委員の皆様方のご協力を切にお願いいたします。



第五回『地域のおたすけ研修会』（平成31年3月9日 於・香川教務支庁）

四国ブロック開催報告

天理教民生児童委員連盟主催「地域のおたすけ研修会」が、本部社会福祉課、香川教区、愛媛教区、徳島教区、高知教区の後援のもと、平成31年3月9日香川教務支庁において開催された。研修に先立ち山田連盟委員長の趣旨説明があり、続いて本部より社会福祉課長板倉知幸氏、開催ブロックから中腰治夫香川教区長より挨拶があった。

研修会は地元の社会福祉関係者の基調講演、及び連盟会員の実践的発表、パネルディスカッションでは質疑応答、及び意見交換がもたれた。参加者は55名であった。



第二講 地域のおたすけに取り組む

①子ども食堂について

上平智一（天平分教会長）

教会における地域社会での役割を話し合い、教えの道場を社会化するなかで、地域での支え合いに関与する。人々の見守りのできる教会を目指して、子どもの貧困に着目し、学童保育の立ち上げや問題意識をもってPTA活動や町内活動等について参画した。その上で困難を抱えた子どもの実際を知るに至り、教会としてできる事はないかとの思いから、心のやすらぎ居場所の創設に地域の関係者との交流をもとに、多くの公的機関のアドバイスを受け、平成28年4月に「おかえり子

ども食堂」を立ち上げた。

今では、子どもやボランティアスタッフを含めて50〜60名が集う大規模なものになった。信者の様々な協力や食材セットでの寄付や、格安での提供など各方面から支援を受けている。「学習支援おたすけ教室」の実施については、地元大学生や教員OBなど約10名が支援に関わっている。また、学校の長期休み等には、餅つき大会やトン汁会、こどもカレー調理実習会などを企画し、子どもとのふれあいや語らいの中で健全育成を心がけている

また、地域の高齢化とも合いまって、ふらっと立ち寄ることのできるエイジレスな、よろづ相談サロンとして「ふらっとカフェ」や昼食や夕食を提供する「みんなの食堂」を開設

して、バイオリン演奏等の音楽ボランティアの協力を得て、憩いの居場所を提供している。助け合いや寄り添いの必要な社会であっても、困った時に助けてくれる人が傍にいない現状もある。高齢者共生社会では助ける人が周りにいないと成り立たない。積極的に「たすけあいカード」を作成し、お話し相手やゴミ出し、手造り弁当の配食や包丁研ぎ、家庭大工や子どもが熱を出した時などの送迎等々、関係機



関と連携した、いちれつきよ

うだいの居場所として教会も求められている。これからは全方位的な、心の貧困から抜け出す居場所の運営を心がけたい。

② 地域子育て支援拠点・つながりを作ること

吉永道子（梅一分教会長夫人）



吉永氏は会長である夫の了解を得て、以前から願っていた地域における子育て広場「かあかのおうち」を約3年前に開設した。一時預かり保育施設としては民間では初めてのことであった。何よりの動機は子育てで悩むお母さんたちの力になりたいというおたすけの精神である。孤独な子育てで追いつめられ、虐待などの問題にも



なり兼ねない過酷な子育てにそつと寄り添い、ママたちがホッとできる、「おかえり」と言える実家的要素のある、町のほつとステーションとして、教会が心のオアシスになることを目指している。「かあかのおうち」を利用するには行政との関係性もあり、NPOの立ち上げや地域の人々の協力や支援は欠かせない。吉永氏の個人的な人脈や紹介等で様々な専門的経験を有したスタッフが揃っている。

一見無駄なお節介と思われるコミュニケーションの中から、深刻な相談や心のつながりが生まれ、いざという時に安心して子どもを預けられ、いつで

も来ていいよと言ってもらえる居場所があるだけでもうれしいという声が寄せられている。

何よりもママ達に心のゆとりを与えること。妊娠、出産、育児等のストレスから孤立を防ぎ、地域のみんなで子育てを支えるため、ママティラピス教室を始め、助産師によるおっぱい教室。ふれあいコンサートやネイティブ英語教室等々、地域の拠り所としてのセンター的役割を、親神様を祀るところで実践できることに意味を感じている。

教会と地域の人々とのつながりから見えてくるものは、よふぼくの社会参加を基本としたおたすけではないかと思っている。

③ 誰にでもできる社会貢献ファミリーサポートセンター活動

丸川久江（綾修分教会長夫人）



実子が7人いる中でPTA活動や地域の人々とのつながりは欠かせないものがあつた。塾通いや登下校での人間関係の中におたすけにつながる様々な課題が隠れている。

町の広報でファミリーサポートの活動を知ったことがきっかけで、さほどの抵抗もなく子育て支援の養成講座を受けることにした。普段の自分の生活と変わらないと思

い、何事も気遅れすることなく、前向きなチャレンジ精神で一歩踏み出すことがサポート活動に欠かせないと思う。保健福祉センターに登録し要請に応えるが、ニーズとしては保育所への送迎が数多くあつた。動くと思わず出合いがあり、「こどもおちばがえり」のお誘いや、よふぼくとしてアプローチする場面に遭遇する機会のあることに気付いた。

第二講 「社会福祉協議会の活動について」 (講演要旨)

講師 大川 裕子氏

高松市社会福祉協議会
地域福祉課長補佐・権利擁護センター長

●相談業務から見えてくる子どもの背景

近年は妊娠初期から様々な相談にのっている。生活困窮者の相談が多く、保護を受けるための住民票もなく、2年間もライフラインが停止していた人もいた。個別的な困窮者の問題にはファミリーソーシャルワークが必要である。日本では相対的貧困が主な対象であり、年収の中央値の半分122万円、月約10万円。国民年金のみで生活している人は相対的貧困層になり、子どもの貧困率は7人に1人になる。



子どもの貧困において子ども自身に責任はない。貧しければ虐待のリスクは高くなる傾向があり、学校給食が唯一の命綱で、健康面に影響が出ていて、発達や精神面、社会性にも課題のある子がいた。家庭生活の中で経済的にも良識あるモデルが形成されにくく貧困の連鎖の起る状況がある。一般的に自尊心感情が低く粘り強さが乏しくあきらがめが早い、短絡的になりやすい。学業や就労の継続に困難

を抱え、金銭管理も曖昧で利他的な生活に陥り将来像を描けないことが多い。年齢に関係なく自己肯定感の弱さの克服に意識を持ってない場合が多く、支援を拒否することもある。生活困窮家庭の状況は外からは見えにくい。行政の中でも部署が違えば縦割りで、相談窓口のたらい回しで諦める人も少なくない。支援者の考え方やスキルによっても対応の違いが出てくるため、相談者の人生が大きく変わってくる現状もある。

●支援制度の概要

現場のワーカーもスキルアップを図っている。子どもの支援を中心にする基本は、①思いやりネットワーク ②フードバンクものバンク ③生活困窮者支援 ④家族相談↓まると福祉相談員等の配置。ゆりかごから墓場までワンストップ相談を心がけている。専門性の高いことは相談内容を要約し次に繋げている。ほんの少しお手伝いすれば自立できる生活困窮の方を支援し、民生委員等に地域の困りごとの情報提供をもらう等コミュニティソーシャルワークが必要である。また、企業提供の支援や引っ越し家財の再利用、お寺やおつクラブ、フードドライブ、職員たちの持ち寄り等、全方位の自立支援協力を始め、困窮者の金銭管理や就労相談を展開している。

ハローワークの出先機関のジョブコーナーにおいては困窮者等への支援や企業への補助。また、学習支援事業も高校進学を目的に中学生対象に民生委員が管理者として関わっている。地域の子どもに直接声をかけることが、子どもたちにとってはすごくうれしくありがたいことである。大学生等が兄弟や友達関係として関わることが親世代よりも親しみやすく、自分も頑張ればあの大学生のようになれるという、生き方のロールモデルを示すことができる。また、学習の中で様子の違う子どもの発見があり、スクールソーシャルワーカー等との連携により、いじめ等への適切な対応が可能になる。

子どもの問題にしても家族全体のファミリーソーシャルワークが必要であ

る。こどもの貧困コーディネーターへの相談にしても本人からの相談は少なく、専門機関同士の連携と重層的支援によって解決に結びついている。本来の家族問題は社協だけでは困難で、地域や民間の活動団体等との情報交換等の連携支援が大切である。相談員は地域共生社会をめざす中で困りごとの相談を丸ごと引き受けているが、家族支援は自分一人が頑張ってもできない。社協がプラットホームになりボランティア団体等とも連携し、必要なところにワンストップでつなぐ、横のつながりを大事にした支援を基本にしている。

● 社会資源の活用と支援の姿勢

大事な視点は、してあげるのではなく、少しでも自分でやる気持ちになってもらう自立支援である。支援者がいなければ生きていけないという支援は問題であり、依存させることのない支援、その場しのぎではなく、計画性をもつてつなぎ、付き合っていくことが大事である。

世帯全部がうまく回っていく支援。一人で抱え込まず地域全体の資源を生かし連携する。難しい状況でもケース会議で同じ方向、方針をもつて、支援者の役割分担や指導に齟齬を生まないこと。スクールソーシャルワーカーや保健師、福祉事務所、民生児童委員、主任児童委員。法テラスや子育て支援 NPO。こども食堂。子どもの居場所等の様々な活用はあるが、行政への相談はハードルが高いと感じやすい。しかし、社協が介入しすぎると総合的継続的な行政との連携が難しくなる。専門家といってもそれほど多くはなく、横の連携がないと地域支援は機能しない。誰にもわかる総合的相談所が必要であるが、一つの事業所だけではできない。天理教だけでも難しいのではないか。

それぞれの専門性を大事にしながら連携をとり、必要なサービスがなければ作り出していくこと。天理教の組織力があり方向性が同じ活動であつても、その関係性のない人たちの排除だけはしないほしい。方向性は同じで

あつても独善的にならず地域との連携を大事にしてほしい。

支援を受ける対象者の中には、我がこととして捉えないで、どこか他人事に見る傾向性のある人もいる。あくまでも自立できるようにお手伝いする姿勢が大事であり、支援者の常識ではなく、押しつけの支援ではない、その人の主体性を尊重した支援が必要である。

向こう三軒両隣を気かけると向こうも気にかけてくる。個人情報の問題はあるが、そつと見守り互いに情報を交換すれば、各方面から支援の輪が広がる。ちよつとした勇気をもつて声をかけることから始まる支援が、構ってほしい SOS のサインを見逃さないことになる。細く長くいい。あそこの子どもおかしいなあ、様子が変わったなあと、困っているようだとなつたら、関係者に知らせて関わることが大事。子どもは地域の宝です。みんなが協力して見守っていく社会を築きたい。

パネルディスカッションでの主な意見内容

- ・ 一歩踏み出す勇気とチャレンジ精神をもつ。
- ・ あくまでも自立を基本にした支援の姿勢が大切である。
- ・ 子どもの発達課題等について専門的な認識も必要である。
- ・ 社会の苦悩的状况をおたすけのニーズと捉え、教会活動の新しい取り組みにする。
- ・ 問題解決の意識と人間関係を構築し教会の社会性の保持につとめる。
- ・ 行政への届出や許可、資格等の必要性について協力者を得る。
- ・ 子育て支援や寄り添い等について、教祖おやさまの道具衆として親心をどう発現できるか。
- ・ 人さまのお役に立ちたい、人さまに喜んでもらうようつとめさせていたいただきたいという信条を、社会の人々と分かち合い、陽気ぐらしの世の中を目指していきたい。

『天理教こども食堂ネットワーク』発足

天理教民生児童委員連盟主催のもと4月25日、「天理教こども食堂ネットワーク」が発足した。教内でこども食堂を運営する人たちや関心のある人たちが集い、情報を共有し各種研修会や講演会の開催によって、広く貧困や食品ロス等の問題を理解するとともに、支部活動としての可能性や他機関との連携により、教会における社会的活動について座談会がもたれた。役員は左頁のとおりである。



天理教こども食堂ネットワーク発会式

日時／4月25日 社会福祉大会終了後（15時～16時）

場所／おやさとやかた南右二棟 陽気ホール

対象／天理教民生・児童委員連盟委員、会員、教内子ども食堂運営

関係者、子ども食堂に関心のある方

プログラム

- 一、親神様、教祖、祖霊様遙拝
- 一、開会挨拶 山田 常則（天理教民生児童委員連盟委員長）
- 一、来賓挨拶 板倉 知幸（天理教布教部社会福祉課長）
- 一、座談会『天理教こども食堂ネットワークの展望について』
登壇者／湯浅 誠（NPO法人全国こども食堂支援センター 事務局長）・上平 智一（天理教民生児童委員連盟委員）・渡辺 一城（天理大学教授、フードバンク奈良代表）
司会／村田 幸喜（社会福祉課長補佐、天理教社会福祉研究会委員長）
- 一、質疑応答
- 一、諸連絡
- 一、閉会挨拶／吉永 道子（天理教民生児童委員連盟副委員長）
- 一、親神様、教祖、祖霊様遙拝



「こども食堂ネットワーク」役員紹介

主任スタッフ

民生児童委員連盟副委員長

吉永 道子（敷島・梅一分教会長夫人）

NPO 法人

子育てひろば かあかのおうち（東京都墨田区）

スタッフ

上平 敏子（大縣・天平分教会長夫人）

おかえりこども食堂（岡山県岡山市）

速水 あけみ（中河・春港分教会長夫人）

なかよしごはん（愛知県名古屋市中）

古川 照樹（郡山・片桐分教会長）

かたぎりこども食堂（奈良県大和郡山市）

清水 学（東・同慶分教会長）

どうけいこども食堂（奈良県天理市）

藤原 泰二（高安・根如分教会長）

ねごと子ども朝食堂（大阪府堺市）

岡定 紀（南海・紀ノ川分教会長）

おのみなとこども食堂（和歌山県和歌山市）

吉田 幸恵（芦津・紀内分教会長夫人）

きうちこども食堂（和歌山県海南市）

相談役

社会福祉課長補佐・社会福祉研究会委員長

村田 幸喜（本部准員・満洲眞勇分教会長）

しんゆうこども食堂（奈良県奈良市）



平成 30 年度決算及び 31 年度予算

30 年度収入合計	589,992 円
30 年度支出合計	451,202 円
31 年度 繰越金	138,790 円

収入の部

項 目	30 年度予算額	決算額	31 年度予算案	備 考
繰越金	315,992	315,992	138,790	
年会費	240,000	241,000	250,000	
研修参加費	65,000	33,000	60,000	おたすけ研修会 33,000
利 子	10	0	10	
合 計	621,002	589,992	448,800	

支出の部

項 目	30 年度予算額	決算額	31 年度予算案	備 考
おやさと研修会	150,000	26,289	40,000	講師接待、情報交換会
おたすけ研修会	330,000	318,073	280,000	
委員会助成	50,000	50,640	40,000	
慶弔費	30,000	0	30,000	
事務費	30,000	38,200	40,000	連盟だより印刷代
予備費	31,002	18,000	18,800	
計	621,002	451,202	448,800	

監査報告

監査の結果、活動は適正に実施され、帳簿の記載
並びに証拠書類等は適正に且つ正確に処理されておりました。

平成 31 年 4 月 18 日

年会費納入について

天理教民生児童委員連盟では、会員の皆様に、年会費の納入をお願いしております。今年度未納の方には振込用紙を同封しております。
何卒、ご協力の程、よろしくお願いいたします。

○年会費 一人 1,000 円

下記の教区は教区で一括払い

埼玉、東京、石川、福井、山梨、岐阜、静岡、愛知、京都、兵庫、岡山、山口、徳島、香川、愛媛、高知、鹿児島